

旧三笠屋旅館・蘇峰館の現況図面の作成と建築的特徴

卯野木 海尋¹ 森山 学^{2*}

On the architectural characteristics and creation of current architectural drawings of Sohokan, Former Mikasaya-Ryokan in Minamata City

Mihiro Unoki¹, Manabu Moriyama^{2*}

The purpose of this paper is to provide an architectural evaluation of the Sohokan. It is a wooden building of “Yunoko Onsen Umi to Yuyake,” located in Yunoko. As for previous research, the report by Moriyama can be cited. However, no detailed study has yet been conducted. In this paper, a measured survey was carried out to make the present drawings of Sohokan, and a partial restoration of the drawings was attempted in order to clarify its architectural characteristics. The construction period and its historical background were also investigated. Together with neighboring inns, Sohokan has supported the development of Yunoko. Its exterior employs chidori-hafu gables, forming a distinctive landscape characteristic of the area. Sohokan shows both the common features of modern sukiya-style architecture in the Showa period and its own unique expressions. Furthermore, its composition and design, which make use of the site layout and surrounding scenery, demonstrate consideration for regional characteristics. It is expected that further investigation of Hiranoya and Reiszyukan, which were built in the same period, will further clarify the characteristics of the builders, regional identity, and the architectural trends of the period.

キーワード：近代和風建築、旅館、水俣市、徳富蘇峰

Keywords：Modern Japanese Architecture, Ryokan, Minamata City, Soho Tokutomi

1. はじめに

1.1 目的

熊本県水俣市湯の児は昭和初期から温泉街として発展してきた地域である。戦争や水俣病などの時期を乗り越えてきたものの、近年閉業する旅館・ホテルが増え、2003年には10軒だった営業軒数は、2025年現在、6軒のみである。

湯の児に位置する「湯の児温泉 海と夕焼け」の木造棟「蘇峰館」（図1）は、戦後、湯の児海岸線に建てられた木造二階建て旅館である。蘇峰館は、徳富蘇峰（1863-1957）が帰郷の際に宿泊した由緒があるとともに、いわゆる近代和風建築に相当する、昭和前期の良質な旅館建築としての性質を見て取ることができる。しかし、これまで建築的に評価されることがなかった。

本研究では実測により蘇峰館の現状図を作成し、一部復原を試み、その成果も踏まえて建築的特徴を明らかにすることを目的とする。

既往研究としては森山の報告⁽¹⁾を上げることができるが、

1 専攻科（生産システム工学専攻）
〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627
Advanced Courses (Production Systems Engineering Course),
2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan 866-8501
2 生産工学教育部門（建築社会デザイン工学分野）
〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627
Faculty of Engineering (Division of Architecture and Civil Engineering),
2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan 866-8501

* Corresponding author:
E-mail address: m-moriya@kumamoto-nct.ac.jp (M. Moriyama)



図1 蘇峰館北西側全景

表1 現地調査日

調査内容	調査日
実測調査	① 令和6年 6月26日
	② 令和6年 7月10日
	③ 令和6年 10月8日
ヒアリング調査	④ 令和6年 9月14日
	⑤ 令和7年 2月16日

詳細な研究は未着手である。

1.2 研究方法

実測調査、ヒアリング調査、文献調査を行う。前二者は表1の通り実施した。ただし中廊下より南東側は、1階が

厨房、2 階がスタッフ用スペースとして利用されているため、未調査である。分析にあたっては、地域の変遷の調査、周辺の旅館建築との比較も行った。

2. 来歴

2.1 温泉街の発展

湯の児では、明治 30 年（1897）から温泉掘削が始まり、大正 14 年（1925）に中村嘉三郎が泉源を発見する。ただしこれは湯温が低かったため試掘を重ね、ようやく昭和 4 年（1929）に再び中村嘉三郎によって成功する。ここから海岸に温泉を引き、舟湯が始まる。さらに 3 年後には第二泉源を発見する。一方で、昭和 9 年（1934）に湯の児山上道路を完工して交通の利便性を向上させ、昭和 2～13 年（1927～38）にかけて湯の児海岸線の埋立工事を、温泉地としての利用を目的として、3 度実施している。これにより温泉街としての発展の基盤が固められた⁽²⁾。

昭和 6 年（1931）の「国鉄案内」、昭和 8 年（1933）の「湯の児温泉場案内」を参考にすると、平野屋旅館をはじめ 13 軒の旅館があったようで、その活況が伺える。

ヒアリングでは、昭和 30 年（1955）頃には、三笠屋旅館の蘇峰館（木造二階建て）、後述する同本館（木造三階建て）、荅洲館（木造三階建て）、松島楼（木造二階建て）、平野屋（三階建て）が海岸線に沿って建ち並び、三味線の音が聞こえ、博多どんたくが来るなど、とても賑わっていたようである（ヒアリング：中村温泉、2024 年 9 月 14 日）。

また昭和 30 年（1955）には、木造五階建ての「山海館磯館」が西湯の児に建設される⁽³⁾。これらのうち現在も利用されているのは蘇峰館のみであるが、三笠屋旅館本館を除くすべての建物が現存している。こうした昭和前期建設の数奇屋風木造旅館群がこの地域の特徴をなしている。

一方で昭和 28 年（1953）、水俣市において原因不明の奇病が発生し、昭和 31 年（1956）には水俣病が公式に発見されたことを受け、徐々に訪問客数が激減し、苦境に立たされていく。

蘇峰館の北方向の沖には、海岸からほど近くに、一の島、二の島、三の島がある。一の島には頂上に「湯の児温泉神社」が鎮座し、美しい松林となっていて風光明媚な海岸風景を形成していた。昭和 35 年（1960）7 月には、一の島へ渡る木造の橋を鉄骨造の観月橋に架けかえた。しかし松くい虫に侵された松は、昭和 48 年（1973）には全滅してしまう⁽⁴⁾。

2.2 旧三笠屋旅館の開業と変遷

湯の児海岸線の埋立工事のうち、昭和 6～10 年（1931～35）頃の工事は、島原銀行が行なったようである⁽⁵⁾。

その島原銀行は、昭和 6 年（1931）から旅館「島原屋」の建設に着手する。H 型の木造二階建ての建築である（図 2）。しかし島原銀行が破綻したことで、建設は中止された。

この建物を昭和 12 年（1937）に解体移築し、その際に一階を継ぎ足し三階建てとして、「三笠屋旅館」が開業する。この建物が三笠屋旅館「本館」である⁽⁵⁾（図 3）。



図 2 島原屋（奥）



図 3 三笠屋本館（中央）

（どちらも松原荘所蔵、撮影年不明）

この本館の北側に蘇峰館が建設される。昭和 26 年（1951）の 11 月に始まり、翌年 11 月に竣工する。棟梁は水俣市外平（現・桜が丘）に住む緒方敏行であった⁽⁵⁾。屋根裏の棟札から昭和 26 年 12 月 23 日に施主・田崎兼作によって上棟されたことが分かる。

ただし蘇峰の間のみ、徳富蘇峰を迎えるために突貫工事が行われ、竣工に先立つ昭和 27 年（1952）5 月に完成している⁽⁵⁾。この時、徳富蘇峰が宿泊したことから「蘇峰館」と名付けられた。

その後、三笠屋旅館は増築を繰り返す。昭和 44 年（1969）頃には鉄筋コンクリート造 5 階建ての東館を増築している。その他にも建設年が不明であるが、鉄筋コンクリート造 2 階建てのパラドール、鉄筋コンクリート造 3 階建ての旧館が建設されている。本館は昭和 51 年（1976）に解体され、同年に鉄筋コンクリート造 6 階建ての西館が建設される⁽⁵⁾。このように鉄筋コンクリート造に置換されていく背景には、いざなぎ景気に期待し収容力を上げること、昭和 36 年（1961）の消防法や、昭和 41 年（1966）以降、各地で相次いだ旅館・ホテルの火災に対応することが目的であったと考えられる。

三笠屋旅館は 2011 年 1 月に営業を停止する。同年 11 月、蘇峰館をはじめとする建物群を活用して、「湯の児温泉 海と夕焼け」がオープンした⁽⁶⁾。

3. 蘇峰館の建築的特徴

3.1 概要

蘇峰館はコンクリート造の布基礎の上に建つ木造二階建てで、入母屋造平入、棧瓦葺きである。小屋組みは木造キングポストトラスである。建物の南東側に前面道路があり、当初はこの前面道路に向かって玄関が設けられていたと考えられる。現在は、南東側に前面道路との間に鉄筋コンクリート造 2 階建てのパラドールが、南西側に鉄筋コンクリート造 6 階建ての西館が増築されており、前面道路側からはほぼ展望できない状況にある。一方、北西側は海岸線で、当初の姿を展望できる状態にある（図 1）。

木材には大もみじ、山柿、けやき、ひのき、杉が使用され、各室の広縁には松板が使われている⁽⁵⁾。

実測図面を図 4 に示す。

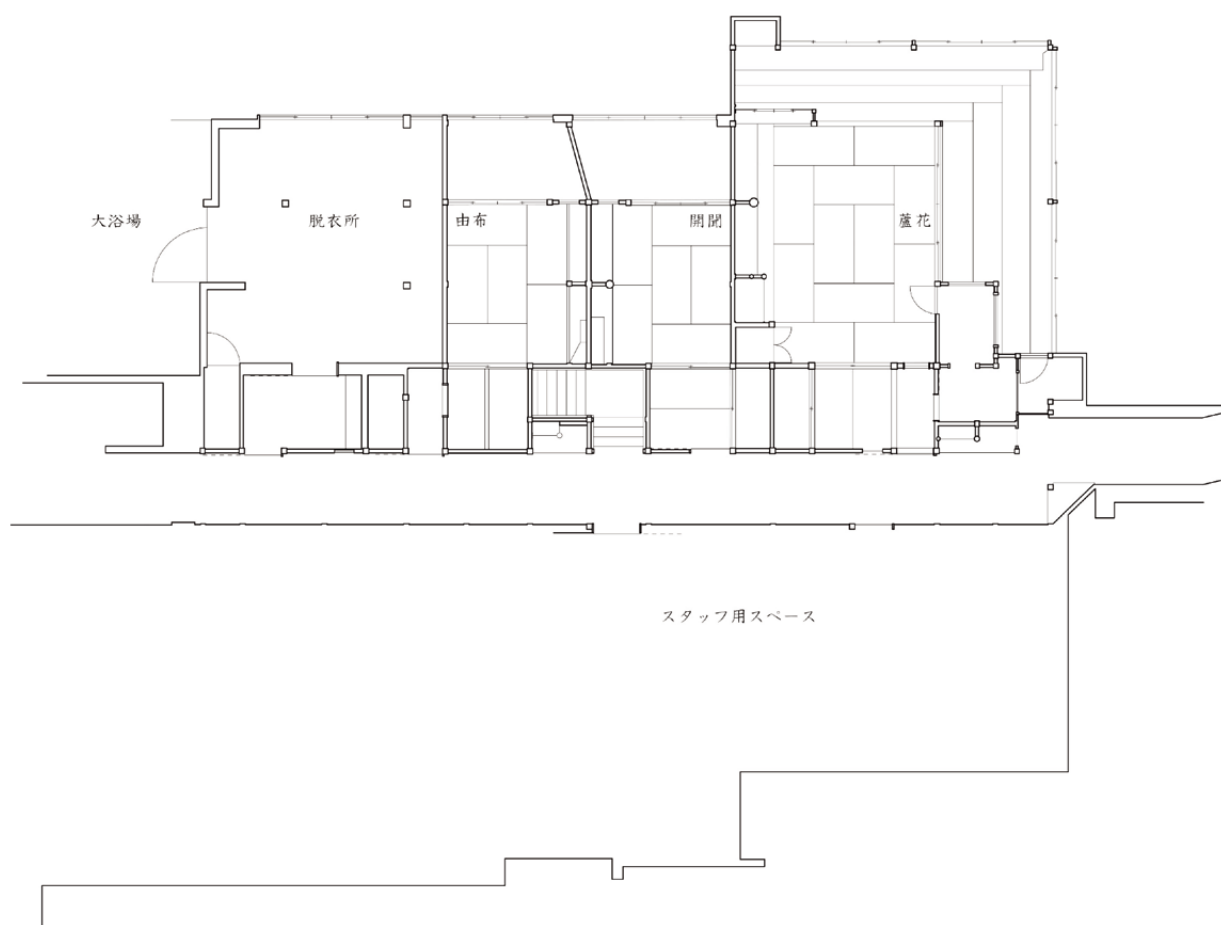


図4a 蘇峰館 現状一階平面図（実測図）

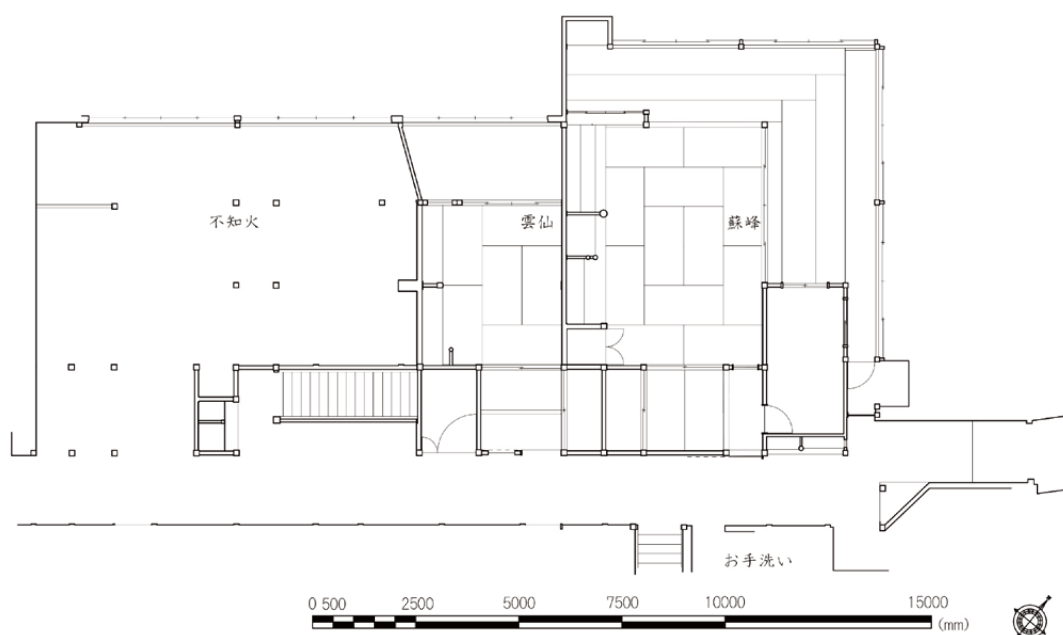


図4b 蘇峰館 現状二階平面図（実測図）

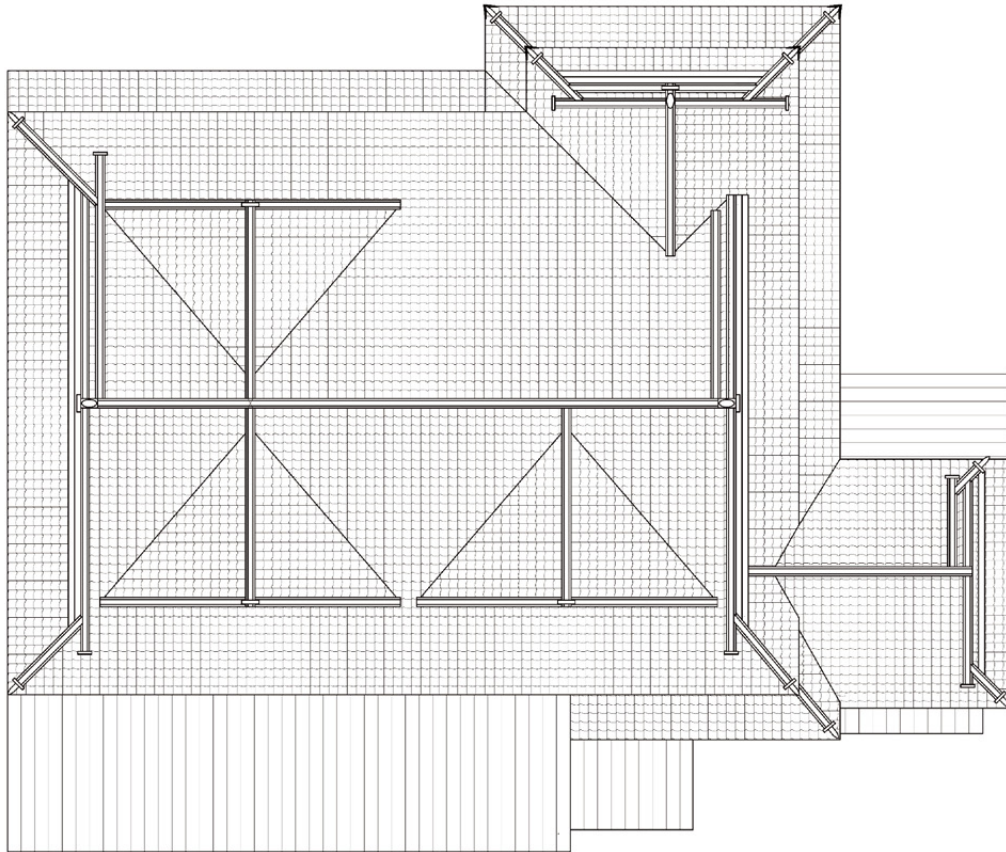


図4c 蘇峰館 現状屋根伏せ図
(*平面図をもとに写真から屋根の概形を作成)

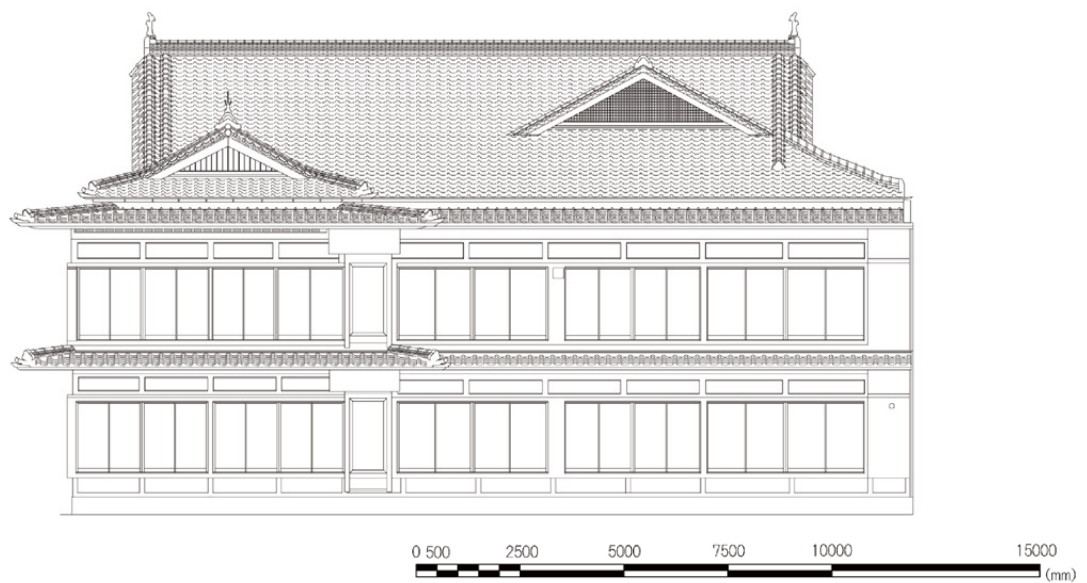


図4d 蘇峰館 現状北西立面図 (実測図)



図4e 蘇峰館（中廊下～客室） 現状断面図（実測図）



図5 昭和34年当時の蘇峰館の屋根（出典：文献7）



図6 鬼瓦の屋号紋



図7 風切丸

3.2 外観

入母屋造の屋根には南西面に二つ、北西面に一つ、千鳥破風が乗る。また建物の北東方向と北西方向に、入母屋造の角屋が突出している。この屋根の下には下屋をかけ、一層目には底をかけている。

入母屋破風や千鳥破風は狐格子である。主屋と北東の角屋の入母屋破風にはかつて懸魚があったようで、現在は破

損し、その一部が痕跡として残っている。昭和34年（1959）の写真（図5）には確かに懸魚がある。また主屋の破風には、旧三笠屋旅館の屋号紋である丸に三の印も認められる。鬼瓦は覆輪丸張鬼瓦で、中央に上記の屋号紋（図6）がある。主屋と北西の角屋には鯨瓦が乗る。また海側にのみ風切丸（図7）を付けていて、強い海風に対策していることが分かる。

このように屋根が層をなして破風が連なり、社寺建築の意匠も備えた重厚な佇まいと、角屋の突出による多様な景観を特徴としている。

入母屋造の屋根に千鳥破風が乗る造りは、隣接する芥洲館、平野屋にも見られ、また山海館磯館では千鳥破風を入母屋破風に格上げして表現しており、これらが温泉街の景観的な特徴となっている。

北西側は1、2階ともにアルミサッシの掃き出し窓が側柱列の外側に立てられているが、現況から、かつては吹き放しで雨戸のみで閉じたと考えられる。その内側に高欄のつく広縁があり、建物の全幅で海を眺望することを実現している。

角屋は1階が「蘆花」の間、2階が「蘇峰」の間で、高欄付きの広縁が二面に巡る。海に向かって飛び出している形は、翼廊の楼閣に見立てているようであり、内部からの眺望も広角で、蘇峰館のなかでももっとも格の高い客室になっている。

3.3 内部構成

中廊下をはさんで北西側（海側）に客室があり、1階には客室の「蘆花」、「開間」、「由布」、脱衣所があり、2階には客室の「蘇峰」、「雲仙」、食事室の「不知火」があ



図 8 1 階廊下



図 9 2 階廊下の座敷飾り



図 10 2 階階段



図 11 「蘇峰」の狭間火頭窓

る。客室はすべて、前室と座敷飾りのある広間、奥に広縁の構成となっている。

「蘇峰」と「蘆花」が角屋に位置する。

脱衣所は客室 1 室と外部につながる廊下を改修したもので、この廊下は改修前の客室と「由布」の間にあった。

「不知火」は二部屋の客室を改修して一つにつなげた食事室で、旧客室の名称が不明なため、ここで旧客室を「A 室」、「B 室」とする。「不知火」は「A 室」と「B 室」の柱を残して壁を撤去し、バリアフリーの板張りとしているが、欄間や天井仕上げは当時のままである。

中廊下の南東側は前述の通り、今回は調査していないが、ヒアリングから、1 階は昭和 51 年（1976）から厨房として活用されていて、2 階は宴会用の和室大広間をスタッフ用スペースに改修したようである（ヒアリング：湯の児温泉海と夕焼け、2025 年 2 月 16 日）。

廊下（図 8）にも上下階共に座敷飾りが二つずつ置かれている（図 9）。小空間だが、床の間と床脇から成り、落とし掛け、地袋や天袋がある。地袋は琵琶床の扱いで束柱を立てる。束柱上部に釣束を対応させ、脇壁を曲線状に輪郭をとる。書院障子の位置に洞口や障子を開け明かりをとる。

廊下の天井は折上竿縁天井である。支輪からさらに一段持ち上げて天井を吊り、2 階は中央の竿縁を吹き寄せにして 1 階よりも立派にしている。欄間は蝙蝠型の格狭間の壁抜き欄間とし、ケヤキの変木輪切りと竹により霞を表現していると考えられる。壁には菱、小判、短冊、分銅の飾り窓が見られる。

階段（図 10）は折上天井で、洋風親柱を持つ手すり、手すりの格子窓、壁の角切の飾り窓、竹の落とし掛けと四方



図 12 「蘇峰」の座敷飾り



図 13 松の洞口



図 14 三保の松原の鍔絵

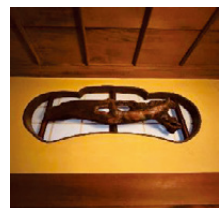


図 15 前室境の欄間



図 16 博多織の屑の床壁

入隅の欄間、座敷飾りなど多様な意匠を施し、廊下より数奇屋風を強調している。

3.4 「蘇峰」の間

蘇峰館二階の角屋に位置し、前室、広間、広縁、現在物置に活用されている部屋からなる。

前室と広間の境には、ケヤキの変木と竹三本が入る、松の型の壁抜き欄間がある。壁抜きの開口下には、草の形の彫が掻き刻まれている。

鉤型に配される広縁からは、不知火海と一の島を一望することができ、夕日が射し込む。その床には幅 60cm ほどの松板を張り、柱間に高欄を立てる。北西側広縁は一間幅で、突き当りの壁に狭間火頭窓（図 11）を開ける。

北東側の広縁は 1.5 間幅で、突き当りに物置がある。その壁に洋風の型ガラスの引違い窓が開く。本来は客室名に相応しく、書院が書斎に転じたものではないかと考える。

広間は 10 畳で、折上竿縁天井である。四囲の小天井は板に竹目地とする。鴨居・長押には黒い焼き目が見られ、小壁は黒い金聚楽である。広縁境の欄間は、引違い障子を立てた角柄欄間である。

座敷飾り（図12）は向かって左から、違い棚、琵琶床、床、付書院の順に並ぶ。

違い棚の海老束には現代的な月と星の吹き抜きがあり、筆返しは蕨形である。違い棚と琵琶床の境の脇壁には竹の柱を立て、琵琶床の束柱には二股丸太を用いる。違い棚から琵琶床にかけての天井は籠目網代である。

床柱は大もみじの変木である。琵琶床と床の間の境の脇壁には四方入り隅の洞口を開け、ケヤキの変木輪切りと竹を差し込む。床の天井は寄木仕上げである。

座敷飾り周辺の床柱や落とし掛け、床框、立足束、無目鴨居、束柱、戸当たり束、棚板には面皮があって、野趣あふれる。

書院欄間と書院障子は松に鶴、違い棚と琵琶床の境の壁には松の洞口（図13）、天袋上部に描かれている漆喰の鍔絵は宝船と富士に三保の松原（図14）としており、前室境の欄間（図15）も含め、松尽くしとする。当時の蘇峰の間から見た一の島の松林にちなんだと考えられ、特に三保の松原の宝船は、打たせ舟が浮かぶ不知火海の光景に見立てたと言える。

床壁はもっとも特徴的で、博多織の屑をまぜてねり込んであり（図16）、朱、緑、銀などがちりばめられて色鮮やかである。

「蘇峰」は博多織や鍔絵、様々な銘木など、様々な数奇屋風意匠を使ったにぎやかな空間である。

3.5 「雲仙」の間

二階、「蘇峰」の隣にあり、前室、六畳の広間、一間幅の広縁からなる。室名は、旅館から眺められる風景が由来と考えられる。

広間の天井は竿縁天井である。

座敷飾りは奥行きが浅い床脇と床、平書院からなる。床壁に練り込まれた博多織の屑は「蘇峰」と比べ赤みが強い。

床脇は釣竹の釣り棚をもつ釣床風と、これに直角に交差する袋床風の立体的構成である（図17）。向かって左、他の座敷飾りより前にせり出して、袋床風の袖壁がある。袖壁には笹の葉型の洞口がある。この袖壁裏にある釣り棚の違い棚と天袋の向きは、他の座敷飾りの向きに直角に交わる。袖壁は上部で小壁と接続し小壁が座敷飾りの間口一杯に架け渡されるが、天井との間に空きをとった状態である。袖壁・小壁はスクリーンのように奥の座敷飾りを見え隠れさせ、奥行き感のある立体的効果を生む。床脇の地板は複数の樹種の面皮の板を張り合わせ、さながら銘木図鑑の趣で凸凹の抑揚（図18）が目立つ。

脇壁の洞口の形状は珍しく（図19）、書院窓の形状に呼応しているようであるが、噴火する雲仙がモチーフではないかと推察する。書院窓の霞も、雲仙にかかる様子を表現していると考えられる。

広縁には、隣室「不知火」との境に、後補の間仕切壁が立てられている。当初は角屋の「蘇峰」を除いた客室は広縁伝いで連続していたと考えられるが、個室化の必要から立てたのであろう。一階も同様である。

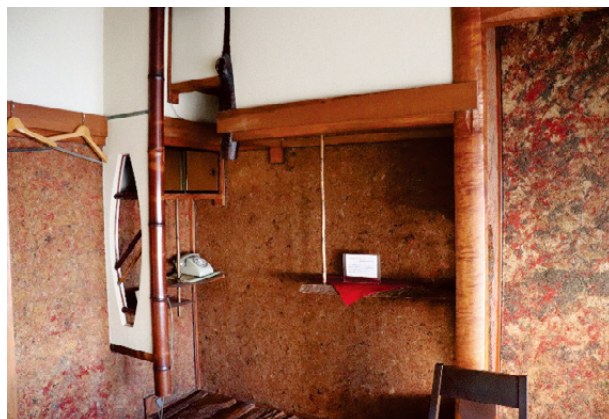


図17 「雲仙」の立体的に交差する床脇

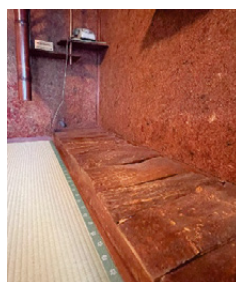


図18 床脇の地板

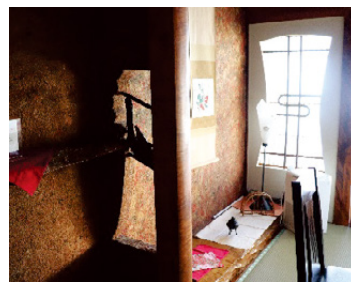


図19 洞床と書院窓

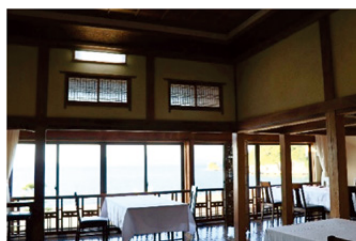


図20 「不知火」の「B室」

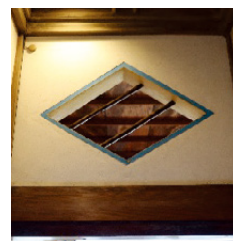


図21 欄間

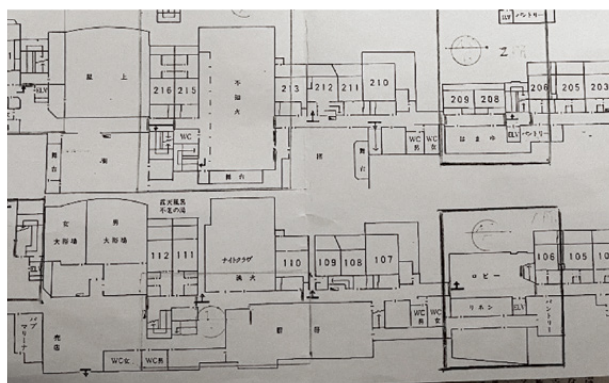


図22 防火戸警戒区域を示した館内マップ（1976以降）

3.6 「不知火」の復原

現状から以下のように復原できる。「雲仙」側の「A室」は、北東側に浅い座敷飾りを備えた棹縁天井の六畳間で、「B室」（図20）は南西側に座敷飾りを備えた折上棹縁天

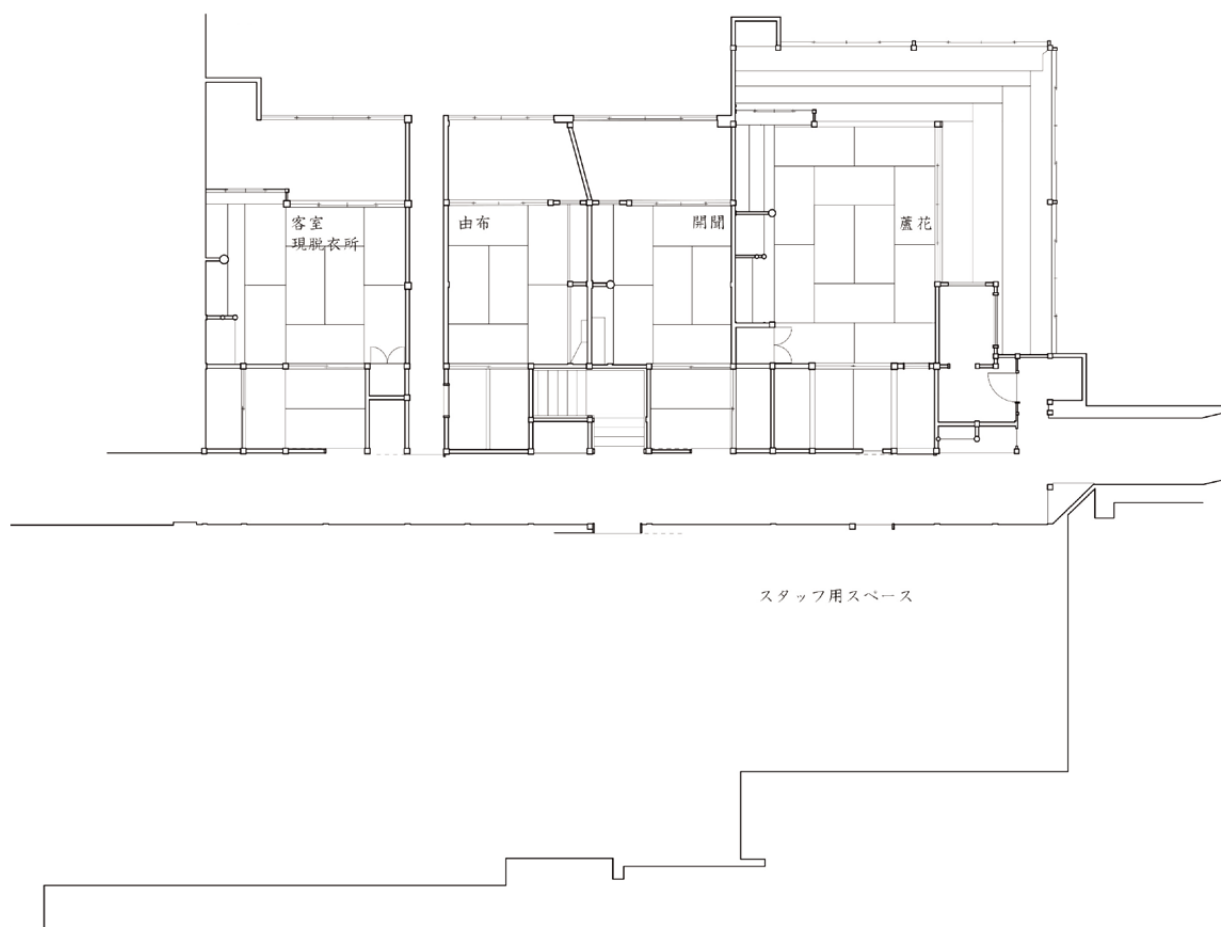


図 23 a 蘇峰館 復原一階平面図

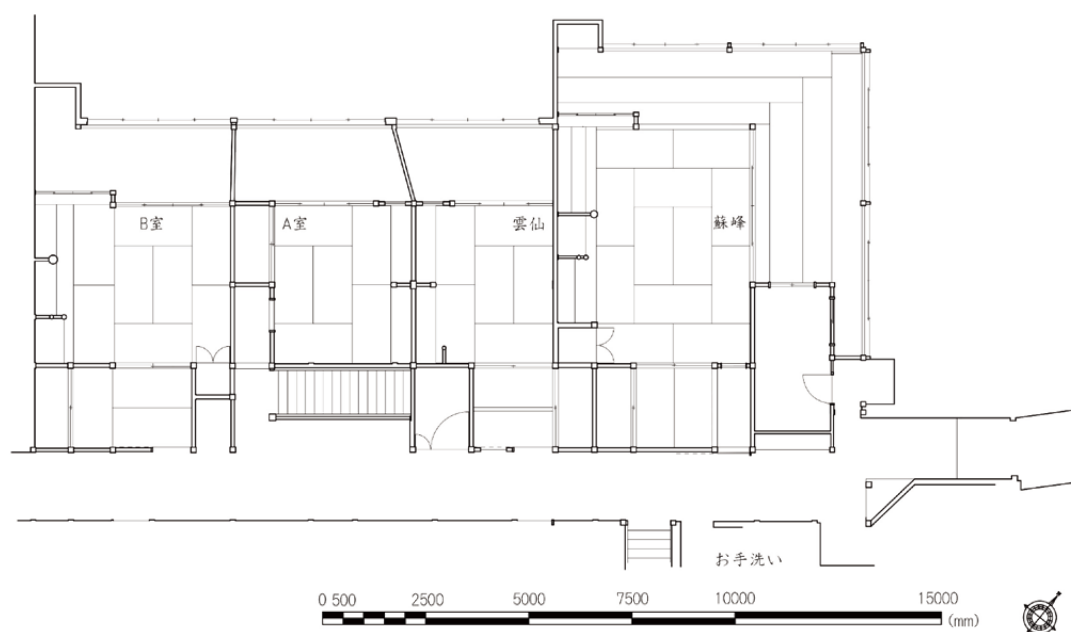


図 23 b 蘇峰館 復原二階平面図

井の八畳間に前室がつく。座敷飾りの存在は、書院の柱と自然木の無目鴨居、床の落とし掛けが現存することから推定できた。「B 室」の折上支輪は博多織の仕上げである。旧「B 室」は、角屋の二室に次ぐ格式の客室であったと考えられる。

「不知火」の中央に並ぶ二列の柱に囲まれた空間については、次のように推測できる。現在、左右の列の鴨居下端に板が張られているが、欄間(図 21)が「A 室」の広間境及び広縁境に設けられていることから、「A 室」側の鴨居には溝が掘られ建具が立っていて、「B 室」側は壁だった。つまり、ここは「A 室」の前室であったと考えられる。

昭和 51 年(1976)築の西館を含む防火戸警戒区域を示した館内マップ(図 22)を確認すると、前室想定の方縁側は押入として描かれている。ただし広縁境に欄間が存在することから、当初から押入であったとは考えづらく、のちに押入に改修されたと推測する。

「不知火」と一階の脱衣所を復原した図面を図 23 に示す。

3.7 「蘆花」の間

「蘆花」(図 24)は、蘇峰館一階の角屋に位置する。「蘇峰」とほぼ同じ構成だが、「蘆花」の物置部分にはトイレが設置されている。このトイレも本来は書斎だったと考えられる。天井は船底天井である(図 25)。

広間の天井は折上竿縁天井で、小天井は網代とする。しかし天井裏の寸法不足が原因と考えられるが、折り上げ高さが低い。

座敷飾りは、「蘇峰」が向かって左から違い棚、琵琶床、床、付書院の順であるのに対し、「蘆花」は琵琶床、違い棚、床、付書院の順である。

違い棚と琵琶床の境の脇壁には「蘇峰」同様、竹の柱を立て、琵琶床の束柱には二股丸太を用いている。琵琶床をなす地袋の側面の壁に、ケヤキの変木輪切りをはめ込む。違い棚の海老束は楕円型に彫りぬかれ、筆返しは唐波である。天井は竹の棹縁を吹き寄せとしている。

床柱は節付き丸太の変木である。脇壁の洞口は上部のみを入隅とする花頭窓風(図 26)で、これは北西側の広縁の突き当りの壁に開けられている花頭窓と同じ形状である。落とし掛けには、ねじりのついた雑木が使用されている。

小壁が二重になっていて、手前の小壁の下端は琵琶床前から円弧を描いて切り上げられ、床柱前では隅丸の長方形で壁が抜かれている。

書院欄間には茄子と鷹、書院障子には宝船と富士に三保の松原とし、一富士、二鷹、三茄子を表現している(図 27)。

床壁には博多織の屑は使用されていないが、改装された可能性がある。また、面皮の自然木を各所に使用しているものの「蘇峰」と比べ抑制されている点、「蘇峰」の狭間花頭窓と比べて省略された花頭窓、折り上げ高さの低い天井、というように「蘇峰」に次ぐ客室として計画されたことが分かる。

また「潮来天地重」と書かれた大額がある。この書は徳



図 24 「蘆花」の広間



図 25 「蘆花」のトイレ天井



図 26 洞口



図 27 一富士、二鷹、三茄子の書院



図 28 「由布」の広間と前室の境の欄間

富蘇峰によって三笠屋旅館滞在時に書かれたものであり、当時は蘇峰の間に飾られていた⁽⁵⁾。

3.8 「開聞」の間

一階、「蘆花」の隣にあり、二階の「雲仙」とほぼ同じ構成である。室名は、隣の「由布」と併せ考えると、どちらも郷土富士に由来していると言える。開聞岳は薩摩富士、由布岳は豊後富士である。

広間は六畳で、座敷飾りは奥行きが浅い床脇と床、平書院からなる。床脇は亀棚である。洞口、書院窓には、霞が表現されている。書院窓の形状は四方入隅である。

3.9 「由布」の間

「開聞」に隣接し、「開聞」とほぼ左右対称の構成である。かつて「由布」横に外部につながる廊下があって、その廊下に前室の入口を開いていたため、現状でも同じ位置に入口がある。前室は階段下にあるため、天井は低く勾配がつく。

前室と広間の境の欄間は富士の壁抜きで、豊後富士に由来している。その内側に変木と竹をあしらうが、それが羽を休める鷹のように見える(図28)。富士は旅館全体では他に、「蘇峰」の天袋上部の鰻絵と「蘆花」の書院障子に見られる。

床脇の天袋と地袋は斜めに向いて動きがあり、特に地袋と連続して鏡台が造り付けられている(図29)。狝潜りには松皮風の鋭角的意匠が取り入れられている。生活道具を取り入れた独特な発想と動きのある構成が特徴と言える。

4. 時代背景との関連

前述した通り、蘇峰館の建設は、戦後復興期の昭和26～27年(1951～52)で、いまだ水俣病が認められていなかった時期である。昭和期の近代和風建築は一般的に、明治期と比べ、意匠的に数寄屋風の傾向を強めていき、豪華さや緻密さを競うようにして作られていた⁽⁸⁾。近隣の日奈久温泉街には、明治初期から昭和初期までの近代和風旅館があるが、その傾向が良く認められる。数寄屋風の表現を行う上で、寺院建築や洋風の意匠も採取し、新しい技術や材料、デザイン趣向が取り入れられ、新規性のある表現も見られた。



図29 鏡台のある地袋

蘇峰館は、重厚な外観、自由で新奇な発想の表現、面皮や二股などの銘木・変木を多用した野趣あふれる意匠、花頭窓・懸魚などの寺院建築の意匠、立体的な座敷飾りの構成、博多織を取り入れた新奇で大胆な仕上げ、周辺環境に関連付けて多重の意味を込める吉祥の意匠などが見られる。こうした傾向から、昭和期の近代数寄屋風建築との同時代性が伺える一方で、独自の表現を開拓するに至っている、と評価できる。

また昭和26年(1951)は、綿糸統制が撤廃された時期でもあり、博多織の流通については不明だが、福岡県で製造された久留米絣は生産が急増したようである⁽⁹⁾。博多織自体は、大正末期から昭和初頭にかけて繊維の堅牢さといった特性から用途の多様化が進まず、生産量も多くなかったが、昭和初頭以降、かえって伝統工芸品として推進するよう変化していった⁽¹⁰⁾。そんな中、昭和11年(1936)には、国会議事堂の両院協議室の壁布として、博多織が採用された。戦時期を経て、博多織が再び活気を取り戻すのは昭和30年(1955)頃で、その頃には着物ブームを迎える⁽¹¹⁾。

博多織といった、決して日用品ではなく高価で広く知られた伝統工芸品を、流行を先取りして取り入れたことには、それによって人目を引きつつも高い格式を表現しようとした意図がうかがえる。また博多織が十分に復興する以前であったとすれば、推測の域は出ないが、入手しやすかったのかもしれない。

蘇峰館の棟梁・緒方敏行は、昭和30年(1955)頃までに、平野屋、荅洲館の増築工事を手掛けている。また荅洲館の客室は緒方敏行の弟子が手掛けている。この二つの建築物は、蘇峰館とともに、入母屋破風が特徴的な湯の児の景観を作っていることを前述した。今回、これらについて未調査ではあるが、同時代であるこれらの建築との比較調査を今後進めることができれば、作り手、地域性、時代性の特徴をさらに明らかにすることができると考える。

5. 結論

実測により現状図を作成し、旧三笠屋旅館・蘇峰館の建築的特徴を以下の通り明らかにした。

- ・近隣の旅館とともに、湯の児の発展を支えた建築物で、昭和30年(1955)頃までに建設され現存している近代木造旅館5軒のうち、唯一現在も利用されている。
- ・蘇峰館は昭和26～27年(1951～52)に建設されたと記されているが、昭和26年12月23日上棟の棟札を確認した。
- ・外観は重厚で、角屋の突出による多様さが特徴である。千鳥破風は平野屋、荅洲館、山海館磯館とともに、湯の児の特徴的景観を形成する。
- ・寺院建築の意匠、新奇で野趣あふれる意匠、立体的構成の座敷飾り、特に博多織による格式を意識した仕上げなど、昭和期の近代数寄屋風建築に共通する特徴と独自の表現が見られる。
- ・昭和30年代に流行した着物のうち、特に昭和初頭以降に

多様化・発展した博多織を使用することで、高価で格式ある表現を目指したと考えられる。

- ・海側の屋根に付く風切丸、「蘇峰」、「蘆花」から不知火海と一の島の松を眺められる配置、その風景を採用した吉祥の意匠など、場所性や地域性に配慮した建築である。
- ・「不知火」の「B 室」は改修前、「蘇峰」、「蘆花」に次ぐ格式の客室だったと考えられる。その階下にある現在の脱衣所もおそらく同程度の格式の客室であったと推測する。また現況から、改修前の復原平面図を作成した。

(令和 7 年 10 月 7 日受付)

(令和 7 年 10 月 27 日受理)

参考文献

-
- (1) 森山学：「特論 3 熊本県の旅館建築」，熊本県文化財調査報告第 348 集 熊本県の近代和風建築－熊本県近代和風建築総合調査報告書－，p.201，熊本県教育委員会 (2024).
 - (2) 水俣市史編さん委員会編：「新水俣市史」，下巻，pp.896-963，水俣市 (1991).
 - (3) 宮本和義：「和風旅館建築の美 生き続ける木造の宿探訪」，p.143，JTB 出版事業局 (1996).
 - (4) 湯の児島公園 看板.
 - (5) 田崎美孝：「不知火海賛歌」，p.51，p.86，pp.161-162，p.187，pp.201-202，p.224，p.252，p.398，(株)マインド (2003).
 - (6) 水俣市議会事務局：「水俣市議会会議録 平成 24 年 3 月第 1 回定例会 (2 月 24 日招集)」，2-14，p.107，水俣市議会事務局 (平成 24 年).
 - (7) 麦島勝監修：「八代・水俣・葦北の今昔」，p.70，郷土出版社 (2013).
 - (8) 村松貞次郎、近江榮：「近代和風建築」，p.143，鹿島出版会 (1994).
 - (9) 竹内正俊：「福岡県繊維産業の歴史と現状」，SEN'I GAKKAISHI (繊維と工業)，Vol.52，No.4，p.182 (1996).
 - (10) 宮地英敏：「明治前期における博多織の生産動向について」，市史研究ふくおか，第 5 号，pp.61-63 (2010).
 - (11) 岡崎暁：「伝統織物探訪 献上と博多織の歴史」，繊維学会誌，Vol.61，No.10，p.273 (2005).